

同輩集団についての先行研究の再検討  
—大阪・泉州地域にみられる「トモダチ」を手がかりとして—

足高 喜夫\*

大阪信愛女学院短期大学

---

*Human and Environment* Vol. 12 (2019)

A Rethink of Previous Studies on Peer Group in Senshu, Osaka

Atsuo Ashitaka

Osaka Shin-Ai College, Japan

近畿地方の伝統的な地域社会にみられる「トモダチ結び」「トモダチ講」あるいは単に「トモダチ」と呼ばれる小集団が、どのような社会構造をもった地域の中で、どのような役割を果たしているのかなどを検討した。

「トモダチ」は、「意気投合」により結成された「インフォーマルで任意な」小集団である同輩集団とされている。ところが大阪府岸和田市阿間河滝のトモダチの姿は、このような同輩集団の性格とはいくぶん異なり、かなり社会的に制度化されたものであった。

そこで、この事例を手がかりとして、この地域でみられるトモダチの基本的性格を明らかにし、それとともにその民俗学的な位置づけの再検討を行った。

その結果、トモダチは講組型村落構造のなかで形成される講である。地域社会の構造は個人を編成単位とするものである。そして結成の目的はその地域で生活する個人に対して非日常的・非定型的な相互の助力を生涯にわたって行うことである。トモダチにみられる「同心性」はグループ結成の原因ではなく結果であり、「同心性」が生まれる確率の高さによって結びついていると思われる。

キーワード：同輩集団、年齢集団、年齢階梯制、講組型村落、トモダチ

---

## 1. 目的および関心

近畿地方の伝統的な地域社会には、「トモダチ結び」「トモダチ講」あるいは単に「トモダチ」と呼ばれる小集団があることはよく知られている。例え

ば、奈良県下では、「同一垣内に、同じ年生まれの同性の者が二人あれば、いずれからともなく一方の家におもむき、『友だちになろう』という挨拶をなし、一生の友人になり、冠婚葬祭の折々、災難の時に助け合う例がある。同垣内に同齢者がいない時には、他の垣内をさがすこともあり、また必ずしも垣内にとらわれず、年齢も同年でなくっても、一五、六歳になるとウマアイ（性合い）の三、五人で友だちになるともいう」[1](p.339)。京都では同年会と呼ばれるトモダチが冠婚葬祭時の手伝いや定期的な親睦会や旅行などを行っていることが井上頼壽によって紹介されている[2]。また菅沼晃次郎によって滋賀県の

---

\*大阪信愛学院短期大学看護学科  
〒538-0053 大阪市鶴見区鶴見 6-2-28  
E-mail: ashitaka@osaka-shinai.ac.jp

受付：2019年9月30日 受理：2019年10月5日

©2019 大阪信愛学院短期大学

事例が紹介されている[3]。しかしいずれも簡単な報告であって、トモダチがどのような社会構造をもった地域社会の中で、どのような役割を果たしているのかなど不明な点が多い。

このような簡単な記述の報告しか見当たらない中で、しかしながらトモダチについての記述を整理すると、三つの民俗学的な位置づけがあることがわかる。一つは、先に記した井上による講としての位置づけ[2]、二つめは、年齢階梯制の年齢組としたもの[4]、そして三つめは、ホウバイ・ドシ・ツレ・ネンアイなどともに同輩集団と位置づけたものである[5](pp.49-55)。しかし一つめのものは、京都でみられる宮座や講の事例を集めたなかでトモダチを講として事例紹介しているだけであって理論的な展開はみられない。また二つめの年齢階梯制の一形態としての位置づけは、あとでみるように事例として不適切なものであった。したがって、現在のトモダチに関する民俗学的に有効な位置づけは同輩集団ということになる。

この同輩集団というのは、同年輩で気が合い、「せいぜい数十人から十数人といった程度の小人数からなる不定型な」集団で、「人数・役員・規約等の制度的なものを欠き、全くインフォーマルで任意な存在で、いわば同士の結合」であるとされている。なかでも「互いに気が合うということで、『意気投合』という同心性こそがツレ(＝同輩集団)を結成する際のポイントになる(カッコ内は引用者)」という[5](pp.107-108)。すなわちトモダチとは、「意気投合」により結成された「インフォーマルで任意な」小集団と捉えられることになる。これは、私たちが日常生活でなにげなく使っている「友達」の概念に近いものである。

ところが筆者は、大阪府岸和田市阿間河滝で次のようなエピソードに出会った。ある人が阿間河滝に移り住んだところ、ある日、町内会長がやって来て、「あなたは、ここに骨を埋めて、永久的に移住するつもりなんですか」と尋ねられた。永住する意志を伝えると、「来られた早々で申しわけないけど、ちょうど“だんじり”を新調したところなので、各一軒ずつ十二、三万円の負担を受けてもらっています。一町民となり、一家の煙をあげる以上、町として決めたことだから受けてもらいたいのだが…」と言われた。快く承諾すると、「ところで、〇〇さん、あなた、トモダチいますか」と尋ねられた。突然、何を変なことを聞くのだろうかと思ったが、この町内にはいないが学校時代の友達や職場には友達がいるので、「友達ならいますよ」と答えた。すると「それならいいんやけど」と言って帰えられた。

それからしばらく後に、この来住者は、そのとき町内会長が尋ねたのは「この町内に慣習としてある

トモダチと呼ばれるグループに所属しているのかどうか」だったということ、そして町内会長は、「もし所属していないのであれば適当なグループを紹介してあげよう」と考えていたということに気づいたということであった。

ここにみられるトモダチは、先にみた同輩集団の性格とはいくぶん異なっているように感じられる。竹田が強調した「意気投合」による結合というより、かなり社会的に制度化された側面を強く感じる。冒頭で紹介した報告でも「同じ年生まれの同性の者が二人あれば、いずれからともなく一方の家におもむき、『友だちになろう』という挨拶をなし、一生の友人になり…」といったように、“同じ年だから友だち”といった制度化があるように読みとれる。これでは“お互いに気が合う”かどうかはわからないはずである。

トモダチの事例は、岸和田市のある大阪府南部の泉州地域に広くみられる。そこで本稿では、この地域の事例も必要に応じて用いながら、筆者が以前(平成4～8年)調査した大阪府岸和田市阿間河滝の事例を手がかりとして、トモダチについての先行研究の再検討と、その結成要件の再考、地域社会の構造分析の必要性についての考察をおこなった。

## 2. 同輩集団としての研究史上の位置づけについての再検討

### (1) 同輩集団としてのトモダチ

**同輩集団の性格** 同輩集団としての位置づけは、年齢階梯制の年齢組として位置づけて、村落運営を担う「フォーマルな存在」として捉える立場と、「インフォーマルな任意な存在」とする対照的な立場がある。

民俗学では一般にこのような若者の小グループは、定型的で村落運営を担う「若者組」と区別して「若者仲間」と呼ばれてきた。そして、ふつう、婚姻成立に大きな役割を果たすものとして注目されてきた<sup>\*1</sup>。竹田は、若者の段階を過ぎてもこの「若者仲間」が同じ集団を保つ場合もある点に注目し、これを「年齢小集団」と名付け、さらに「同じ年齢であることを条件に、同年講とか同年会などの組織を作る『同齡集団』」と、「二～三歳の年齢差を問わずに性格の一致した者同士の作る『同輩集団』」に分けて、概念の精緻化を行っている[5](p.50)。

竹田はこの概念の精緻化の中で、トモダチを「同齡集団」の項で取り上げているが、「同齡・同年とはいえ、それは原則であって、たいていは上下一～二歳、甚だしくは三～四歳の開きのある者までも包み込んでいる」事実注目し、「その限りでは、厳密には『同齡集団』と言えず、『同輩集団』の類型

に入れなければなるまい」と述べている[5](p.54)。

同輩集団の構造的性質として、竹田は、結合に至る三要件すなわち「同齢性・同輩性」「近隣性」「同心性」をあげている。また機能的性質として、地域的には濃淡はみられるが、おおよそ次のように述べている。ふだんからよく話をしたり、酒を一緒に飲んだり、親兄弟に話せない事柄でも話し合える間柄で、しかし金の貸借や事業の共同あるいは農作業のイイなどはおこなわず、もしおこなうとすれば、返しを期待しないカセイ(加勢)をする。とりわけ「婚姻に対する媒介・関与の役割の絶大さ」が指摘されている。すなわち、儀礼的交際面では冠婚葬祭、なかでも婚姻と葬送での活躍がみられ、日常・実用的機能では田植えなどの定型的な共同労働よりも困った時の相談相手や応援の役割を果たしている

\*2[5](pp.208-227)。

**結成要件の再考** 竹田は、同輩集団が結成される要件を三つあげているが、なかでも先にみたように「互いに気が合うということで、『意気投合』という同心性」を強調している。

この点について少し疑問に思うことがある。それははじめにみた奈良県下の事例で、「同じ年生まれの同性の者が二人あれば、いずれからともなく一方の家におもむき、『友だちになろう』という挨拶をなし、一生の友人になり…」というような報告がされていることである。これを文字通りに受け取れば、ここには「同心性」というより、同年で同性であれば自動的に友人になるという制度化がみられるように筆者には感じられる。また先にみた、筆者が出会ったエピソードからも、「同心性」とは別の結成の要件を想定したくなる。

考えてみれば、何らかの理由で結びついた結果として、「同心性」が育まれるといったことも十分に考えられるのである。したがって本稿の事例検討では結成の事情に注目した。

**地域社会の構造分析の必要性** また竹田の同輩集団の研究では、地域社会から同輩集団のみを取り出し、その構造と機能の比較検討が行われている。そのため、地域社会の構造についての検討が希薄であった\*3。ある意味ではインフォーマルな集団を扱うのだから当然のことなのかもしれない。しかしながらインフォーマルは、フォーマルなものとの関係によって規定されてくるものと考えられるから、地域社会の構造的な分析の視点が必要であろう。

ところで竹田の同輩集団の研究は西南日本の沿岸地域での調査研究に重点が置かれたものであった。それは竹田の関心が兄弟分の起源を探るものであり、なかでも「親友系兄弟分」の起源を西南日本の沿岸地域でみられる同輩集団と考えていたからである。

ここで注意したいのは、西南日本の沿岸地域はいわゆる年齢階梯制村落の特徴を持ったところが多くみられるということである。私も以前、年齢階梯制をともなった西南日本の沿岸地域の同輩集団の調査を行ったことがある[6]。そこでは、同輩集団の性格とほぼ一致するものがみられた。

同輩集団と年齢階梯制との関連性については、竹田が言及しているものを筆者は管見にして知らない。しかしながら次にみるように、トモダチを年齢階梯制の年齢組とする位置づけや、あるいはトモダチのような同齢者の小集団と年齢階梯制との関連性を論じる研究がある。そうだとすると、トモダチのみられる地域の社会構造の分析、とりわけ年齢階梯制の存在の有無、ということも重要な調査課題となる。

## (2) 年齢階梯制にもとづく年齢組

そこで年齢階梯制とトモダチとの関連性をみてみよう。わが国にみられる年齢階梯制を整理・分類するなかで、京都市内および近辺でみられるトモダチを同年講としてとりあげ、年齢階梯制の年齢組(age-set)と位置づけたのは関敬吾である[4]。

関によればこの同年講は、「少年期あるいは青年期に何歳かの年齢の幅をもった七、八名のいわゆる気の合ったものによって組織され、原則的には終生解体」しなく、「年齢階梯制はそれぞれの年の組(子供組・若者組・中老組・老年組など)において固有の機能をもつが、同年講においては(中略)、それ自体の成長に応じておのずから機能に変化し、年齢階梯制のそれぞれの段階の機能と対応する(カッコ内は引用者)」としている[4](p.139,155)。

だが、このトモダチの位置づけには、関自身も述べているように問題がある。その問題とは、関が事例として使っている京都市左京区一乗寺の「ともだち」\*4の場合、そのメンバーは稲荷講・伊勢講・宮座の三段階を経過するのだが、宮座は三部落の単一組織であるのに対して、稲荷講・伊勢講は任意の団体であって、この三段階の経過には有機的関連はないという事実である\*5。

しかしながら、筆者が調査した近畿地方でもかなり周辺部にあたるが、兵庫県の西播磨地域の事例では、年齢階梯制の年齢組の形態をとった「ともだち」とよばれる小集団がみられるので、早急な結論は出すわけにはいかないだろう。

他にも、トモダチのような同年齢の小集団と年齢階梯制との関わりについては桜井徳太郎や江守五夫の言及もある[9](pp.346-351),[10](p.162)]。例えば江守は次のように述べている。「年齢階梯制は、社会成員をいわば長幼の序によって上下の関係に位置づけるものであるが、まさにその反射的效果として、そ

ここでは同齡者はつねに同等の地位を享有するのである。かくして年齢階梯制は、異齡者間の上下的關係と同齡者間の水平的關係を同時に含む社会制度として現れるのであり、そしてこの同齡者の關係がとくに前面に現れる場合には、年齢階梯制は同齡結合体の重疊的編成物という姿態をとったり、あるいはさらに各種の同齡的な習俗がうみだされたりするのである」とその関連性を指摘している[10](p.162)。そして「『同齡講』や『同齡感覺』に関する習俗が、すべてがそうとはいえないにしても、大部分において、年齢階梯制に内包された同齡結合の契機にもとづいて形成されたと考えることは十分可能なのである(傍点は引用者)」と述べている\*[10](p.166)。

### 3. 岸和田市阿間河滝のトモダチの事例

#### (1) 地域概況

##### 岸和田市阿間河滝の村落構造の概略

大阪府の南部、泉州地域の中心部に位置する。調査当時、256世帯・977人(平成13年10月1日現在・住民基本台帳)、現在218戸。戦後、6、7軒が他町より入った以外は、町内分家で増えた。主な産業は米とみかんの生産である。

昔、町内は、上出・中出・下出の3つに分けられ、それぞれの下に「近所」と呼ばれるまとまりがあった。現在、町内会の下部組織としては隣組がある。隣組は、地域割で12、3軒が1組で14組ある。現在ではほとんど解散してしまっただが、葬式を手伝う同行がある。12、3軒で組むが、必ずしも地域割にはなっていない。

また、イッケとよばれる本家分家関係は「倒れるまで代々続く」という。奉行人分家もイッケと考えられている。葬儀ではイッケの人が葬儀委員長を行う。田植えはイッケが手伝い、稲刈りは昔からその家の者たちだけでやっていた。

婚姻は昔から他町の人と多く、イトコ夫婦もあるが町内婚は半分もないという。

講は、秋葉講・だいたい講(伊勢講)・金毘羅講・毘沙門講(信貴山)・庚申講などたくさんの宗教講がある。また、八人衆を頂点とする宮座も行われている。

#### (2) トモダチの事例

##### 事例1 昭和三年生まれの男性・Hのトモダチ

**結成** Hのトモダチは八人のグループである。小学校の同級生の男性は35~6人いたが、そのうち同じ阿間河滝に住むものは男性が五人、女性は六人だった。まず、この同級生の五人のうちで三人のグループができた。残りの二人は他町へ働きに出て行っ

ていた。女性は女性で別に作った。次の年に卒業した学年には男性が15人おり、トモダチの組が2組できていた。その中の3人が「入れて欲しい」といってHたちに加わり、また次の年に卒業した二つ年下の者が「トモダチ入れてよ」といって加わった。このようにして8人のグループができた。グループ結成にあたっての特別な儀礼のようなものは無かった。

**日常のつき合い** 「今の人は、トモダチを組んだときから家でカラオケをしたりして積極的にいろいろしているが、私らの場合、40才位になってから積極的に『寄って遊ばか』というようになってきた」という。それまでは、盆とか正月・田植え休み・神社の祭礼の日にだいたい限られていた。グループのできた頃は、戦争中ということもあって、今の人のように家に集まって遊ぶということは無かったという。夕食を食べてからよく遊びに行った。また自転車に乗って映画をよく見に行ったという。

結婚までは、雨が降った時にはトモダチと一緒に俵や草履・縄などを作る藁仕事をしたこともあった。田植えは、作業がとでも遅れているトモダチを助けに行ったことはあるが、Hの家では田植えの上手な人を雇っていた。

結婚すると夫婦で寄る。妻のグループで寄るとき、夫も一緒に寄るといふ繋がりもある。年に1回、定期的に旅行に行っているといい、話を聞いたその年の2月は五夫婦揃って沖縄へ行っている。

**祝儀不祝儀** 昭和28年に結婚したが、結婚式ではトモダチがいろいろと手伝ってくれた。また、親の葬式のときは、亡くなったその日から来て、掃除などいろいろと自分のことのように手伝ってくれた。霊柩車に棺桶を運ぶ時、親戚が少ない場合など、トモダチが担ぐ。

35~6才のとき、トモダチの一人が亡くなった。死装束から官桶に入れるまですべての世話をした。特にトモダチの仕事というのではなく、自分の気持ちでやったという。トモダチが亡くなるとグループで香典を持っていったり、「友人一同」として柩(話を聞いた当時は盛籠)をあげたりした。

**他町から来た婿養子のトモダチ** Hの家に娘婿が来て4~5カ月過ぎた頃、Hは娘婿にふさわしい「真面目」で「よくできる」グループを探し出し、「お前らのトモダチに(娘婿を)入れてやってえな」と頼みにいった。すると「皆で相談するわ」ということになり、それから何日かした後、「ほな、入ってもらおか」と返事をもらった。

このグループはだいたい2カ月に1回ぐらい、順番に、お互いの家(トヤと呼ぶ)に夫婦揃って集まっている。その時は夜中の一時や二時ぐらいまで遊んでいる。Hらの年齢になるとだいたい1年に1回

ぐらいしか夫婦で集まらない。そして、いつ旅行しようかという旅行の相談ぐらいしかない。

また、隣の土生滝町から近所に引っ越ししてきて、3カ月ぐらいの人がいた。「お前、トモダチできたか」と尋ねると、「いや、まだ、できてませんし、誰も声かけてくれる人もないんです」ということだった。そこで年齢を聞いて、適当なグループを探してあげた。他所から婿養子に来て七年が過ぎてもトモダチのグループに加わっていない人もいた。その家の親父が若いグループに頼みにいっても繋がりが無いために断られていた。それでHが頼みにいって入れてもらったこともあるという。

### 事例二 大正七年生まれの男性・Yのトモダチ

**結成** Yとその同級生の一人、それに1つ年上の3人とで5人の気の合う者の集まりである。同級生だからといって皆がトモダチになるというものではなかった。5人とも尋常高等小学校を卒業した者たちであった。

**日常のつき合い** モノのない時代だったので、今の人たちのように旅行とか飲み食いとかはあまりできなかった。皆で集まって話をして遊ぶだけだった。珍しいもの、例えば肉などを食べるとき、たまにトモダチをよんだ。全員揃うということはあまりなく、雨が降ったりして暇なときに個人的に顔をみにいくような感じで往来していた。トモダチやその家族が病気だと見舞に行ったりする。またトモダチやその家族が病気になった時に農作業を手伝うことがあった。トモダチとの付き合いは結婚後も続いている。

旅行は、10年ほど前に、トモダチとそれ以外の人も少し加えて、北海道や沖縄へ行ったことがある。最近では老人クラブで旅行に行っている。

**祝儀不祝儀** 阿間河滝では昔から他町の人との結婚が多く、ほとんど見合い結婚であるという。結婚式にはトモダチが最後まで手伝ってくれる。「トラ明くまで」といって、新郎新婦とその両親、それに濃い親類の2、3人が最後まで残っているのだが、それをトモダチが酒杯をついで回ったり、賄いをしてくれたりした。親類と親類を繋ぐためにいたという。

葬式や家を新築したときもよく手伝ってくれた。

**第二トモダチ** トモダチでも「第一」「第二」というのがあった。「第二」とは、たばこを一緒に吸ったり、酒飲んだり、バクチをしたりするツレであった。

### 事例三 明治37年生まれの男性・Kのトモダチ

**結成** Kとその同級生の2人、そして2つ年上が1人の4人グループである。4人全員が尋常高等小学校卒業である。当時、尋常高等小学校へ行くのは同級生で半分もいなかった。「わしら、等級で言えば中

だった。あんまり上と下とは合わない。家の格好やら、高等小学校へ行ったとかで、同じようなツレが決まってくる」という。最初の集まりでは、ちょっと集まって自分だけで一緒に御飯を食べるだけだった。

**日常のつき合い** 一緒に寝泊まりをするようなことは無かったが、夕食後、町内に三軒ほどあった店屋へよく遊びに出かけた。夜学へも一緒に通った。今は旅行したり「新年会や、忘年会や」とすぐに集まって飲食をするけれど、昔はそのようなことはしなかった。生活するだけで一杯であった。春、周辺の山や池の堤へ弁当をもって花見にいった。これが楽しみだった。旅行は、講で行くお参りがあるぐらいであった。

トモダチの一人が兵隊に行っている間、「本当は手伝わないといけないのかもしれないが」、田の手伝いとかミカン取りとかはしなかった。秋の収穫の時、ちょっと手伝ったぐらいだった。そのようなことはその家の親類がやっていた。

**祝儀不祝儀** トモダチの結婚式では手伝いとヨバレに行行った。結婚式は、嫁が親類と共に婿の家に夜にやってきて行われる。それから夜中の二時頃まで宴会が続くが、トモダチはその間、嫁の親類へ酌をしたりする。このトモダチのメンバーはすべて見合い結婚である。3人が他町、1人が町内から配偶者を迎えている。

葬式では、同行・親類・近所・トモダチで手伝ってくれた。建前は、親類・近所・トモダチ・町内で交際している人が祝を持って来た。

**息子のトモダチ** 息子のトモダチのグループは十人いる。寄るだけである。料亭での宴会に夫婦揃って行っている。トモダチの息子とは別に付き合いはない。トモダチとはそのトモダチが生きている間だけの一代限りのつき合いである。

## 4. トモダチの基本的性格

### (1) 同心性が生まれるという期待にもとづく結成

これまでみてきた事例から結成の契機およびグループの特性を整理すると、①学校を卒業するとすぐに結成され、②同級生を核としながらも2~3才の年齢差のある者が加わった、③4~9人の、④気の合う仲間、ということになる。

これは一見、同輩集団のように「同年代」で「気が合う」ことが仲間を結びつける要件となっているかに見える。確かにメンバーたちはお互いを「気の合う仲間」と言う。しかし事例を注意深くみていくと、「同年代」であるということは事実であるとしても、「気が合う」から結びついているとは必ずしも言い切れない側面がある。

それは調査事例のグループ結成についての説明をみると、「家柄」や「同学歴」であることが重視されているのがわかる。例えば事例二では、「この五人とも尋常高等小学校を卒業した者たちであった」。また事例三では、「四人全員が尋常高等小学校卒業である。当時、尋常高等小学校へ行くのは同級生で半分もいなかった。『わしら、等級で言えば中だった。あんまり“上”と“下”とでは合わない。家の格好やら、高等小学校へ行ったとかで、同じようなツレが決まってくる』」と言っている。

このようなことから次のように述べることができるのではないだろうか。「気が合う」から結びつくのではなく、同じ地域社会に生まれ、同年代であることに加え、家柄や学歴などの類似性を拠り所として、「気が合う」ことを「予期して、結びついている」と考えられる。言い換えれば、一生涯仲間として仲良くやっていけることを期待して結びついていると考えられる。

しかしこれはあくまでも期待であって、期待通りいかないこともあるであろう。ある娘は、筆者に、彼女の父親のトモダチづき合いをさして「友達らしくない友達だ」「トモダチだからつき合っているといった感じだ」と語ってくれた。

ここには個人の自発性や任意の選択を重視したグループの結成ではなく、ある地域社会の構造と関連性をもった一定程度の制度化がみられると考えることができないであろうか。それゆえ、「死亡等によって構成員が減少すると自然消滅」になる一方で、「減少した構成員を補うために二つが合同する場合もある」（泉佐野市机场）<sup>\*7</sup>といったことが行われるのであろう[11](p.590)。事例一のHは、「トモダチがいない人は無い。喧嘩もするけど、それで別れるということはない。夫婦みたいなものだ」とも言っていた。

## （2）トモダチの非定型的な役割

「親戚が少ない人がトモダチを大切にするというのではない。親戚は親戚で大切に、トモダチはトモダチで大切に」といわれている。そしてトモダチづき合いは、当人一代限りであり、家としての継続的なものではない。

日常のつき合い方は定期的な集まりが中心であった。結婚後も定期的に集まる。結成当初の頃は、夕食後一緒に遊ぶことはよくあったようだが一緒に泊まることは無かった。

ではトモダチはどんな目的あるいは役割を果たすために結成されているのであろうか。聞き取りをして得たところでは、トモダチやその親の葬式の手伝いと、結婚式での手伝いが重要な役割として語られ

ていた。また、親戚よりもトモダチを頼って色々と相談や頼み事をするといったインフォーマルな助力がきかれた。そしてある人が「災難に合ったこともなく、平穩に過ごしたので別にトモダチがいて助かったということはない」と語ってくれたように非常時の加勢があった。

すなわち、結婚式・葬式・建前など非日常的・非定型的な役割を担い、生産関係の手伝いである田植えや収穫など日常的・定型的なものは、人を雇ったり親類の仕事であったりして、トモダチとは関係がなかった。

## （3）阿間河滝の村落構造

事例調査地のある岸和田市を含めて泉州地域は宮座が広くみられる地域である。宮座が存在する地域は地縁結合優先地帯といわれる[12](p.61)。

本稿で紹介した阿間河滝や大木では、詳しくは別稿で改めて検討するが、一応次のようにいうことができよう。比較的対等な家々が地縁関係や機能別の集団で組織化され、互助協力をし、それぞれの役職者や世話人などを家並順などの輪番で勤めるといったような特徴を持っている。また、家の系譜関係で結ばれた集団の規模は小さく、田植えなどの互助協力の場面では、イッケという親類関係あるいはイッケが地区内にいないときは近所との互助協力が一般的なようであった。これまでの村落構造類型論からすれば講組型村落といえるであろう。

宮座や達磨講から明神講、年寄講への村人の加入は、一見、年序や年齢集団の累積にみえる。しかし宮座は年序ではなく加入順であると考えられる。また年齢集団が累積しているということだけでは年齢階梯制が存在しているとはいえないであろう。それには「そのような累積をもたらすような社会秩序が存在」し、すなわち「年齢ないし世代の上の者が下の者よりも権威があり、人々の間の関係が年齢の上下によって秩序立てられ」ており、「人々の秩序が家柄、家の地位、財力などによって決まるのではなく、年齢の上下によって決まり、集団的に編成されるという村落構造上の特質を形成」していなければならないからである[13](p.202)。ここではこのような特徴もみられなかった。したがって、調査地には年齢階梯制はみられず、トモダチを年齢階梯制の「年齢組」とする考え方は否定されよう。

## （4）講としてのトモダチ

そこでトモダチの性格を同輩集団との関連でまとめると次のようになる。トモダチは、村落運営を直接には担わないインフォーマルな集団で、そして非日常的・非定型的な役割を担っていた。この点で同輩集団の性格と一致しているが次の点で異なっ

いた。それは、結成が、同心性を契機とした任意なものではなく、むしろ同心性が生まれ、維持されることを期待してのものであること、そして集まりは定期性があり、また、婚姻や葬儀といった非日常的な役割において熱心な協力はみられるが儀礼的な側面が強いという点であった。

このように先行研究による位置づけとの不整合が明らかになってくると、理論的な検討がみられないとして取り上げてこなかった講としての位置づけも改めて考えてみる必要があるだろう。桜井徳太郎によれば、講とは、「宗教上もしくは経済上その他の目的を達成するために、志を同じくする人々の間で組織された社会集団の一種」であり、「地域社会の各分野において互助・協力の仕組みとして考案され、育成された組織体」であるとしている[14](pp.190-191)。こうした考え方から、トモダチは「冠婚葬祭の折々や災難の時に助け合う」という目的のために結成された講であるといってもなんら問題がないことに気づかされる。

講集団の体系的な調査研究を行っている桜井だが、近畿地方にみられるトモダチへの言及はない[14]。しかし「同年講」と、そしてそれとよく似た性格をもつ「寄合講」\*8についての言及がみられる。同年講は「年齢階梯制にもとづく講」として、寄合講は「社交機関としての講」としてそれぞれ取り上げられている\*9。

筆者がここで注目するのは、このような分類を行った桜井が、「講集団をその組織の面から追求して行くと、その特徴とみられる点は結局、講集団そのものが結成される基盤となる地域社会の構造的特質と合致」していると指摘している点である[14](p.179)。それは、おなじ同年輩者の集まりであっても「結成される基盤となる地域社会の構造的特質」が異なることによって、性格の異なったものとして位置づけられるということである。すなわち、年齢階梯制という「地域社会の構造的特質」が存在した場合に年齢階梯制にもとづく年齢組である「同年講」となり、それとは異なった別の「地域社会の構造的特質」にもとづいた場合には「寄合講」となるということである。

そうだとすると、トモダチもトモダチを生み出す「地域社会の構造的特質」を伴って存在していると考えられることになる。本稿での検討では既存の村落類型論に当てはめてこれを講組型村落構造とした。

## 5. 個人を編成単位とする村落構造

本稿では、大阪府の泉州地域でみられるトモダチの基本的性格を次のように考えた。トモダチは、講

組型村落構造のなかで形成される講であって、結成の目的はその地域で生活する個人に対して非日常的・非定型的な相互の助力を生涯にわたって行うことである。そしてそのためには生涯にわたって関係が継続する必要があり、同心性が育まれる可能性の高い、例えば同年代といった属性をもったもの同士が結びつくものと考えた。

ではなぜ「同心性」への期待が必要なのであるかという疑問が起こる。この点については次のように考えた。日常的・定型的な互助であれば定期的に互助の機会がおとずれるので互助は履行されやすい。しかし非日常的・非定型的な互助の場合だと不定期に突然に互助の機会がおとずれることになる。そうすると単なる約束だけではその履行に不安がある。そこで同心性が育まれているような間柄であれば、履行されやすいことになる。「家」が地域のなかで確かな位置を占めていれば、家と家との関係として処理され、同心性をもったトモダチはあまり必要ではないであろう。しかし、家の位置が弱まってきたことによってこのような関係が必要となってきたのではないかと思われる。しかしこのように考えるにはさらに多くの事例調査の積み重ねが必要であろう。

また、講組型村落構造は西日本を中心に広くみられるのに対して、トモダチの報告は近畿地方にみられるという点でもどのように考えたらよいのか今後の課題である。トモダチと同じ性格をもったものがそれらの地域に存在するのか否か調査を進める必要がある。

この点を考える手がかりを与えてくれる考え方が提示されている。それは、「衆」組織を近畿村落の特質であるとする福田アジオの指摘である[15](p.102)。

これまでトモダチがみられる近畿地方の村落は、蒲生正男の当屋制村落\*10という近畿地方の独自性に注目する類型設定もあったが、多くは漠然と西南日本型の村落として講組型村落あるいは年齢階梯制村落として位置づけられてきた。これに対して福田は、「近畿地方村落を独自の村落類型として把握し、その積極的意味」を提示し、「衆」組織を近畿村落の特質であるとする指摘をおこなっている。

それによると、近畿地方の村落は、村落そのものは家を単位として構成されているが、その内部における運営組織に個人を単位とした編成方式が採用されており、それは「定員制によって個人を年齢順とか経験年数順に組織する組織」で、複数の人間が集まってものごとを処理する（衆議する）というものである[15](p.102)。

本稿の調査地の泉州地域にも、「衆」の組織と考えられる宮座が存在する。筆者が以前調査したこと

がある同地域の泉佐野市大木では当屋が村落運営に関わる役割を一部担っていた。宮座が村落運営と関わりを持っていた可能性を考えさせるものがあった。このような近畿村落の特質としてあらわされる「衆」の組織とトモダチの結成とが何らかの関連性があるのかもしれない。これは今後の課題としたい。

## 文 献

- [1] 瀬川清子：年齢階層と同齡感覚と同年講。『若者と娘をめぐる民俗』，未来社（1972）
- [2] 井上頼壽：『京都古習志』。館友神職會（1940）
- [3] 菅沼晃次郎：ナガイリと鍋仲間——大津市南大萱町——。民俗文化 170（1977）
- [4] 関敬吾：年齢集団。『日本民俗学大系 3 社会と民俗 I』，平凡社（1958）
- [5] 竹田且：『兄弟分の民俗』。人文書院（1989）
- [6] 足高壱夫：志摩漁村の『同輩集団』の基本的性格——三重県鳥羽市 I 町の『茶飲み友達』を通して——。関西学院大学社会学部紀要 65（1992）
- [7] 足高壱夫：西播磨地域の『ともだち』——兵庫県揖保郡御津町室津の事例——。研究報告集第 32 集，大阪私立短期大学協会（1995）
- [8] 天鷲良雄：一年令集団に関する調査研究——兵庫県相生市相生南町の友達組について——。ソシオロジ 45, 13-3（1967）
- [9] 桜井徳太郎：『講集団の研究 桜井徳太郎著作集第 1 巻』。吉川弘文館（1988）
- [10] 江守五夫：『日本村落社会の構造』。弘文堂（1976）
- [11] 『日根荘総合調査報告』。大阪府埋蔵文化財協会（1994）
- [12] 赤田光男：『日本村落信仰論』雄山閣（1995）
- [13] 福田アジオ：『時間の民俗学・空間の民俗学』。木耳社（1989）
- [14] 桜井徳太郎：講の民俗。『結衆の原点』，弘文堂（1985）
- [15] 福田アジオ：『番と衆——日本社会の東と西』。吉川弘文館（1997）
- [16] 前田安紀子：配偶者の選択。『講座家族 3』，弘文堂（1973）
- [17] 郷田洋文：厄年・年祝い。『日本民俗学大系 4』，平凡社（1959）

\*1 例えば、前田安紀子[16]。

\*2 例外として、「一般に相互扶助の共同労働は、近隣・親類・同族など間で組織されるのが全国にわたって定型的であるのに対して、奄美大島ではこれらに代って同輩集団が登場する」。すなわち奄美大島では「同輩集団が労働組織としての意義を発揮」しているという[5](pp. 217-218)。

\*3 希薄であったと言うよりその必要性もあまり感じてはいないようだ。例えば、「本来個人より発した友人関係が家族・『家』にまで拡大され…」[5](p.63)、「この慣行がいわゆる同族型村落なり講組型村落なり村落類型論に影響を与えるほど、社会構造の規制に大きく関与しているとは思えない」[5](p.63)、「人間の歴史とともに古いとまで考えられるインフォーマルな『若者小集団』から、何らかの機縁によって、新しい性格・意義を添えつつ、別の若者グループを生み出して行くのである」[5](pp. 58-59)といった記述がみられる。

しかし、「他の社会諸集団との関係」の析出の重要性といった指摘はみられる[5](p.49)。

\*4 男子の場合、6~7歳になると5~7七名ぐらいで組をつくる。初午に初寄りを行う。これを稲荷講ともいう。それから若者の年齢に達すると日待ちを行う。仲間は成講参りと称して伊勢参宮をする。これを伊勢講ともいう。同年講は労働・娯楽的機能を持ち、ことに婚姻には強い力をもつ。

\*5 この年齢組にあたる事例としては別にある。兵庫県の西播磨の沿岸部でみられる「ともだち」というグループがこれに該当すると思う。

\*6 これに対して、同年輩者の集団を年齢階梯制の成立基盤とするつぎのような考え方もある。「年齢階梯に見られる各集団の中に、さらに同齡集団があって、精神的な強い結合を見せている点に目を向けるならば、村落の規模や外的条件によって、同齡集団ないし仲間がしだいに何歳かの縦の層をとった年齢集団に編成されていったのではないか、という疑問を抱かしめる」という指摘がある[17](p.289)。

\*7 泉佐野市機場では、「子供が小学校に入学する段階に達すると、自然発生的に友達が組まれる。親はこれをそれとなく助力する。同年者が少ないときは前後の年齢者と合同して友達を組む。友達になると、春は花見、秋は松茸見と称して、構成員と各回順に当屋になり自宅で賄いをする。自宅での賄いには父母などが助力しておこなわれる。この春秋の会合が少年時代を通じて実施されるが、成人したあとは構成員の建前・婚礼・葬儀という重大な時期に献身的な奉仕をすることになっている。近年では親睦旅行をすることもある。

友達は終生継続するが、死亡等によって構成員が減少



---

すると自然消滅となる。また、減少した構成員を補うために二つが合同する場合もある」[11](p.590)。

\*8「寄合講」とは、「年輩を同じくしている同年者の集合体」で、若者組とは別に「より小さいグループが別々結合体をつくって親密に交誼を重ねている」「私的イングループ」である[9](p.369)。

\*9 桜井は、講を、村落生活のなかで果たしている機能面に注目して、「信仰的機能をもつ講」「社会的機能をもつ講」「経済的機能をもつ講」の3つに分類している。同年講も寄合講もこの社会的機能をもつ講の中に分類している。そしてこの社会的機能をもつ講は、さらに「部落ないし村落共同体内で果たしている講集団の社会的機能」という観点から、①村組織の単位としての講、②同族団結合の単位としての講、③年齢階梯制にもとづく講、④身分階層をあらわす講、⑤社交機関としての講、の5つに分類されている。

\*10 蒲生の当屋制村落という考え方に対して福田は次のように批判している。「近畿地方の村落の特質は家を単位にしている蒲生のいう当屋制村落とは把握すべきではなく、個人に基礎をおいているのである。むしろ彼のいう当屋制村落は関東地方から東海地方において顕著にみられるものであり、近畿地方の村落から抽象される村落類型とは別のものとして把握すべきなのである」[15](p.42)。

---

論文集「人と環境」Vol. 12 (2019)  
大阪信愛生命環境総合研究所編

---